

遅れてきた のらねこ

■僕が岐阜物理サークルの例会に顔を出すようになったのは、ほんとについこの間、昨年の冬くらいからでした。10年ほど前、高校・大学時代の先輩でもある岩佐さんや大野さんから「物理サークルって面白いよ～。一度おいでよ。」などと親切な電話をもらったりしていたのですが、当時は毎週のデートに忙しく(うそか)、「ふーん、そんな人たちがいるのか」てなところでした。だいたい僕は昔から極端な出無精で、当時住んでいた多治見市から岐阜市までのたった50kmが僕にとってはとても遠かったのです。

まもなく、組合の教研集会など(これに於けるも相性あつたのでが)で小川さんや長野さんたちを知りました。

そこでサークルニュース集を買い求めて読んでみて驚きました。こんなに知的刺激にあふれていて、授業の役に立つ本が、たったの¥1000だなんて。そしてそれ以上に、どうしてこんなに本質的で楽しい実験を思いつくのが不思議でありませんでした。

「こりゃ『人種』が違う。僕みたいな平凡な教師のついていける世界ではない。」というのが当時の率直な感想でした。

その後、あの「いきいき物理わくわく実験」が発行され、岐阜物理サークルは海外でも大活躍。平凡な田舎教師にすぎない僕にとってサークルの敷居は、ますます高くなっていくのでした。そのころ僕は人事異動で岐阜市に帰ってきたのですが、岐阜物理サークルは以前よりずっと遠くへ行ってしまっている印象を持っていました。

■ところが、ふとしたきっかけで例会に顔を出してみると、その瞬間からもう完全にハマりました。こんなに面白いところは、そうめったにあるものではありません。

イカサマ超能力から、高尚な数理物理の理論まで、「あ、これはイイ！ 面白いなあ～」という次元で「楽しんで(遊んで)」しまうこのサークルは、とても教員の集まりとは思えないカルサを持っています。

ここには、いままで僕がサークル一般に対して持っていたイメージ(どね?)を一変させるものがありました。

だいたい、例会の昼食時にみんなでビールを飲んでしまう習慣に、まず面食らいました。(だけど、昼間から飲むこのビールがホントにうまいんだなあ！)

ともかく、学校の中や、組合の中でさえ感じることのある違和感、居心地の悪さをこのサークルで感じたことは一度もありません。

それに、例会でひとつの問題をみんなで考えているとき、



僕の鈍いアタマがいつもの2倍くらいのスピードで回転してしまうことがあるのにたいへん驚かされました。きっとここには、そういう「場の力」があるのです。

例会に参加するたびに自分の縮こまった精神が次第に解放されていくような気がします。これが僕にとってサークルの最大の魅力かもしれません。

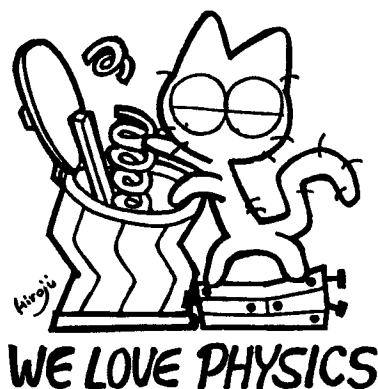
いつだったか、僕が

「いや〜、岐阜物理サークルの敷居は高かったなあ」と言ったら、

「え？ 村田さんがそんなふうにしてたの？」

サークルの虚像だけが一人歩きしてるんだ

よね。はっはっは」と笑われてしまいました。



■例会に参加するようになって、僕自身、少しずつ変化してきたことがあります。

- ①わからないことがあると、「オレが勉強不足なだけではないのか？」などと躊躇することもなく「え？ どうして？」と聞き、思いついたことをすぐ（自分のアタマでよく検討することもなく無責任に）言えるようになってきた。
- ②例会で紹介された面白いモノをすぐマネて作るようになった。（ニュースで記事を読んでもらたぶん作らない。実物を見せてもらうとやはり意欲が違ってくる。）
- ③勉強の仕方がわかった。興味を持った部分だけをいろいろな本で徹底的に調べまくっていると、そのうちなんとかなるものだ。だから、ワカラナイことを数カ月間、頭の中にくらしておくことが苦痛でなくなってきたし、逆にこれが財産に思えてきた。

■ところで、サークルの実践そのものは、近年の授業をめぐる困難な状況を打ち破る原動力となるのでしょうか？ 僕自身は、この困難は、サークルで生み出された実験アイデアくらいで打ち破れるほどヤフなものではないと考えています。

ただ、僕たちが、あくまで自分たちのためだけに（生徒のことなんか忘れて）科学を楽しむことが、結果として間接的に生徒たちの「学び」の姿勢を少しずつでも変えていくことにつながるのではないか、などとというまったくノータンキかつ身勝手な期待を持っています。ともかく、まず僕たち教師自身が「学びの主体」とならなくてはハナシにならない、と僕は思うのです。

そして、こういう路線をとる岐阜物理サークルが総体として教育の世界で果たす役割があるとすれば、おそらくそれは、山口昌男なんかが言うところの「トリックスター」みたいなものだろうな、と思います。うん、これはイイ思いつきだぞ。

（文責 村田）